

農村自然環境整備事業西鬼怒川地区と地域住民との関わり

Relation of a rural natural environment maintainance enterprise nishi kinugawa district and local residents

川嶋一将

KAWASHIMA Kazumasa

1. はじめに 西鬼怒川地区は県都宇都宮市から北にほぼ10kmに位置しており、谷川をはじめ豊富な湧水と、長い間の水田の営みにより、希少な魚類を初め多種多様な生物相が残されている。平成2年度から圃場整備事業が始まったが、面工事などの整備に伴い、用排水路のコンクリート護岸化や田面と水路敷との落差によって魚類等の生息空間の減少が、問題視されていた。地元からの「生き物を何とか残せないものだろうか」との声に、宇都宮大学の先生方と現地調査した結果、平地農村では見られないヤマメなど豊かな自然が残されていることが確認された。そこで、県では農村の生態系の保全に配慮した整備を考え、平成9年度から全国に先駆けて県営農村自然環境整備事業に取り組んだ。

2. 地域住民の参画 事業推進にあたっては、県・町の行政以外に、専門的見地から指導助言を行う学識経験者（アドバイザーグループ）と地元住民を主体としたワーキンググループが中心となり、調査、計画、設計、施工、維持管理の各段階毎にワークショップ等を実施してきた。ワーキンググループの中心である「西鬼怒の川に親しむ会」は平成9年度に設立し、現在の維持管理活動等の母体組織であり、住民、行政、企業が一体となって身近な環境を改善する「グラウンドワーク活動」の手法を取り入れて行われている。

3. 西鬼怒の川に親しむ会

親しむ会は、元々「サギ草愛好会」「白沢宿の会」「川を愛する会」「生活改善クラブ」「土地改良区」等12のグループが団結し、平成8年度に発足（平成9年度に改組）した。100名を超える個人会員と県内の企業会員をメンバーとし、会長を筆頭に21名の役員で構成されている。

3つの部会（第1部会：谷川・保全地、第2部会：白沢拠点公園・九郷半川、第3部会：農村緑地公園）に分かれ、調査・計画段階からコアスタッフ会議等を開催し、事業の推進に携わってきた。

また、自然環境整備事業をサポートするボランティアグループとして、当地区の生態系の保全と復元のための各種活動を展開し、都市住民と農村との交流事業も実施している。

4. 住民活動の変移

【第1段階】行政主導による環境保全への意識向上改革

初期段階においては、環境への理解・関心を高める活動に重点をおき、県内外の環境に配慮した先進地を研修し、個々の意識改革と環境に対するスキルアップを図っ

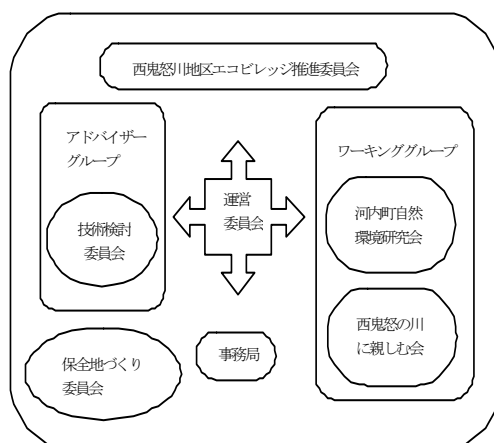


Fig. 1 西鬼怒川地区の推進体制

A propellant system of a nishi kinugawa district

た。また、行政指導の下、谷川保全地の維持管理面からみた整備手法を検討するために、地元住民を主体に植生調査を実施し、自分たちが住む地域の自然環境のすばらしさを再認識し、環境への関心が高まった。

【第2段階】共同作業による共有意識化の醸成

工事に際しての魚の引っ越し作戦や植物の移植作業などを実施することで、圃場整備事業によって失われつつある自然を何とか残そうとする意識が向上した。また、水路の草刈りやゴミ拾いなどの作業を共同で実施することで、現代社会に希薄な地域連帯感が向上した。さらに、子供達にとっては環境教育や総合学習の場として貴重な体験ができ、今後の活動に大いに役立った。

【第3段階】地域住民による主体的活動の展開

当地域の貴重な自然的財産をいかにして残し、後世に伝えていくべきかを真剣に考える絶好の機会をつくるため、西鬼怒の川に親しむ会が主体となり、自然環境フォーラムを開催した。また、谷川上流保全地や白沢拠点公園及び将来の様々な活動の拠点となるグラウンドワーク活動センターの整備・管理計画を検討した。自分たちで管理計画を考えることで、環境保全に対する意識向上がさらに向上した。

5. 各種活動の展開

親しむ会は、こうした活動以外にも、各施設の維持管理は勿論、田んぼの学校を開催するなど、様々な取り組みを展開してきた。特に、田んぼの学校においては、スタッフのアイデアの下、年間計画や活動計画、事業実施計画をつくり、実践し、実施後は、必ず評価・反省・改善し、次回に反映させるなどの工夫を凝らしている。田植え、収穫祭、水路・公園の草刈り、生き物観察会などの行事をほぼ年間を通して展開し、平成17年度は20組の家族が参加した。県内の遠方からも参加し、毎年増え続けている。田んぼの学校の特徴としては、農村をフィールドとし、多様な体験活動を通じ、農業の大切さや五感を感じ、最終的に心の原風景を形成していくことである。こうした取り組みを毎年展開・継続していくことで、地域住民の環境保全に対する意識を確実なものとしていく。

6. NPO法人「グラウンドワーク西鬼怒」へ

こうした取り組みを経て、西鬼怒の川に親しむ会は、ついに、平成17年6月にNPO法人「グラウンドワーク西鬼怒」となった。今後は、行政の手を借りず、自ら施設の維持管理活動や各種行事の中心となって地元を引っ張っていく存在として、より一層の飛躍を期待したい。

7. 9年間の成果

【環境意識の向上】ドジョウ水路の植栽・草刈り作業等を通じ、地域の環境を自分たちで守ろうとする意識が完全に定着してきた。

【環境体験学習の場】地元小学校の参加協力により、次代を担う子供達への環境学習教材の場が提供され、また、田んぼの学校を通じ様々な農業体験を学習する機会が増え、子供達への情操教育につながった。

【地域連帯感の醸成】水路の草刈りやゴミ拾い等、非農家や地域住民と一体化した維持管理活動を展開し、参加者が共に汗を流すことで、現代社会に失われつつある地域連帯感が図られた。

【都市住民との交流促進】田植え・稲刈り等の行事に田んぼの学校の生徒が積極的に取り組み、年ごとに参加者が増え当地域の活性化につながった。

8. 今後の活動の展開

自治会や非農家を主体とした地域参加型の維持管理を促進していきたい。

環境教育の一環として、小学校とのさらなる連携を促進していきたい。

生態系工法の効果が検証されたため、地域資源を活用した環境保全型農業を展開していきたい。